



貸した家

水野仙子

お米は十八になつた。表町の暖簾を疊んで赤味の目にたつ柱などの、まだ障ると湿つぽさうな、木の香の充ちた家に住んでから、もう三年経つたのである。こんなことをつくづく思つた。そんなことを考へたのが不思議にも思はれた。が逃げかけて居た或る考へがふと戻つてくると、急に胸が塞がつてつひ茫然となる。闇は縁側に足をぶらさげたお米の浴衣を白くした。臺所にはコチ／＼と皿の音がする。人氣を暮ふ蚊が時々かほそく泣いては何處にか潜ん

葉に従つて、俗に足入れといふ、假祝言をすましてしまつた。

脊の高い人であつた。同じ町の或る質屋に婿となつて、其家の娘がお産で死んでしまつたあと、直ぐに妹をといはれたのを、厭だといつて出て来た人である。當人こそ見たことがなかつたけれども、其話も聞いて知つて居たし、其娘といふのは、脊の小つちやい、一寸小綺麗な人であつたこともお米は知つて居た。けれども其様な人等は、自分と何の關係もない、時代の違ふ人のやうに思つて居た。縁といふは不思議なもの、それが突然お米の婿となつて来たのである。

その夜はかたばかりの祝宴が開かれて、細い脇の通りの木槿垣から、小座敷の赤い灯の影が、ことあるらしく道行く人の目についた。夜中にふと目を覺ましたお米は、この家に移つた當時、生木を使つた戸や柱の罅裂る者が、こんな時は殊に氣味の悪るかつたことなどを思ひ出して、その頃が懐しいやうな、

で了ふ。

それから三日過ぎてお米に婿が来た。毛ほどもそんな考のなかつたところへ、それも其三日前、突然お米は婿を迎へるべく命せられた。驚くことも出来なかつた。たゞ呆然して暮した四日目の夕、髪結ひが来て、流行真似の束髪を鳥田にして、大きな五つ紋の付いた、母親の空色の小袖を着せられた。十九になると年が悪るい、婿取りは嫁入りと違つて、仕度などは後でいくらでも出来る、かういふ老母の言

淡い佗びしさを味はつた。そして自分ばもうめつきり大人になつたやうな氣がした。

婿はよく働いた。一體が手忠實な人で、大抵のこととはなんでも出来た。これといつて別段用のない家のこと故、反物の包み紙で寫眞帖をこしらへたり、紙の喰み出た小説本を綴直したりした。また薪割りや畑仕事……といつても、種蒔きや草掻り位のものであるが、そんな力業を喜んでやつた。おやつにはいつも鹽のついた握飯に、色のいゝ澤庵が、岡持ちに入れて畑に運ばれた。畑はあちこちのを集めて一町歩ほどある。蔓を手繰つて、茶色になつた莢を揉んで、干して砂糖の袋に入れて、冬まで吊して置くほど、莢豌豆も作れば、菜は勿論大根でも芋でも、その折々の作物は、假令少しづつでもなんでも作つた。男の儀助は用がないから、つひ畑のことなどはかり考へて居る。また自分からよく手を下してやつた。良三郎——婿の名——も、夕暮の一寸の隙を、香りの烈しい韭の刈りあとに灰を撒いたり、

筒袖を裏反しに着て、赤い新馬鈴薯を握りになどに
も行った。萬事さういふ風であつたから、近所の人
に褒められるまでもなく、やかましやの祖母がまづ
第一氣に入つた。これこそ一旦潰れた暖簾を起して
くれるに違ひない、と思ふと、それが自分の功でい
もあるやうな氣がして、どんなに足の痛む時でも、
良三郎が坐る前ではいつも濫い笑顔をつくつた。

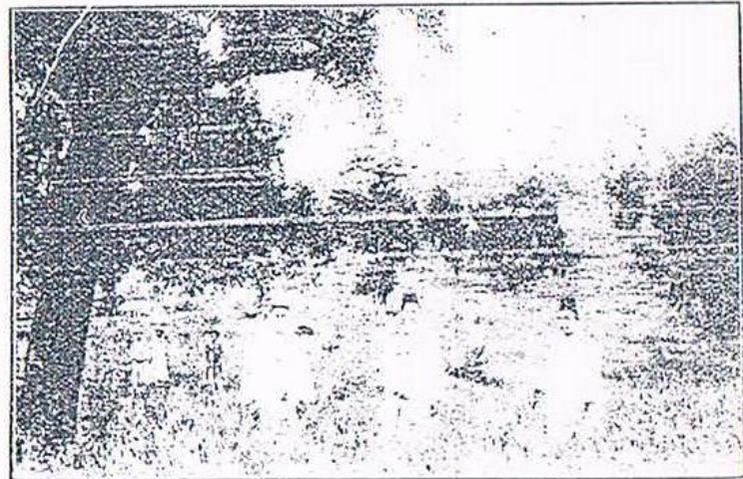
吉屋野の暖簾は潰れたのではなく、潰したのであ
つた。あまり聞こえた店ではなかつたけれども、間
口は可なり廣し、兎も角も其所邊は町の本場だつた
ので、裏町に持つた畑の中に、鑿の音がして鉋屑が
飛ぶ頃から、儀助の心を計りかねた説がさまざまに
傳へられた。まづ第一番に、相場の好きな、よく夕
方は屋根の上のぼつて明日の天氣を見る、角の荒
物店の主人、のそり〜と向ふ側へ景況を見に出掛
けては、「どうでござえし」と羽織の裾をまくつて、や
がて腰から煙管をぬいて、眞つ白にほけた火を掻き
散らし乍ら、「いやどうも〜」が癖の不景氣話、こ

なかつた。お里は目の鋭い、鼻の隆くて尖つた、其
一家の血統をひいて居る。ふら〜として離縁れる

のを氣遣ふことばかり口走るや
うになつた。一寸した風呂敷包
みを見ても、直ぐに實家に送り
かへされるものと思つて、泣い
て騒いだ。その頃から吉野屋の
一家は擧つて成田山の信者とな
つた。儀助は凍る月の夜の井戸
端に、水を浴びたことも度々あ
つた。ところが思ひがけなくお
米が生れたのである。お里もお
ひおひ落ちついて、今でも成田
山には鮭を斷つて居る。

お米が育つまでは、それに引
きずられた形で店の處理をして
来た。夏物冬物の仕入や——吳
服屋であつたから——に、年々二度の上京、それも

婦人くらぶ



れが一番に口では吉野屋の暖簾を惜しんだ。
惜しまれるのも知つて居る。惜しいとも思つて見
る。けれども人に忠告され、ばされるほど、例によ
つて「なアに……」と粘つたやうな一言を笑顔にし
て、儀助はその度に益々我決心が堅くなつて来るや
うな氣がした。無口な代り、言ひ出したら最後、逆
へば益々固くなるのを知つて居る老母は、終ひには
諦めて一言もそれには口を入れなかつた。
儀助は人の好い、笑顔の絶えない、洒落者の父と、
何から何まで行き届く代り、小言もまた随分皮肉な、
母との間の一人子である。親父は祝儀ものや何かの
盡みものなどが好きで、よく三寶の穴のむけ方だの、
三々九度の盃の初め方などを、聞きに來られて喜ん
で居た。羽二重の禪を締めて見たけれども、つるつ
るして駄目なものであつた、といふことが人を笑は
せる自慢話の一つであつた。其親父が腎臟で死ぬ。
儀助は家督になつた。その時はお里といふ嫁を迎へ
てから、三年ばかり經つて居たのだが、まだ子供が

お米に、人形なり毛糸なりを買つて來るの、方が
重なる用であるやうな氣がしてたかも知れない。お米
はだんぐい子になつてく
るし、其周囲の穩かさは、儀助が
分別を働かせる必要もなかつた
嫌ひと名付けることは出来なく
ても、第一商買に必要な競争心
が薄い。年々店卸しの結果が、
あまり思つた程でないのを見る
と、其度にこんな煩はしいこと
をやつて居なくてもといふ氣が
起る。兎も角も四間半の店を張
つて居ては、やれ何税彼税と煩
さく締めつけられ、祭典の時の
屋臺の經費すら、家相當に負擔
ねばならぬ。それよりもまづ上
の倉をつけて、屋賃の上り高が

年に幾何々々、地所地面の上り高がこれ〜と、大さ

つばに積つて見ても、親子三人に老母一人の四人なら大丈夫喰つて行ける。或る日こんなことを考へたのが、月が経ち、年を越したにつれて、つひ断行するまでの運びになつた。萬事を切つて廻して居た番頭の忠助が、同じ町の足袋店に入婿となつたのも決心の原因の一つであつた。夏來れば夏で團扇の意匠の選擇も面倒臭いし、慾がないではないが、さればといつて大儲けをしやうなどの野心もなく……自分には出來ないこと、思つて居る儀助は、今まで大した失敗もなく成功もなく、波瀾のない天地に欠伸をしたのである。

店は小僧どもごとそつくり譲り受けて、家宅に上の倉をつけて借りやうとする人があつた。町の人に存在もわからぬ程、小つぼけな家に小間物店をひろげて居た人で、至つて腰のひくい、早い、一寸こゝら近邊の言葉ではなかつた。馬鹿に色が白くて、大柄な内儀さんは、またなか／＼の愛嬌もので、體に似合す聲が優しかつた。其噂さがひろがると、あつて、夜はそれに灯を入れた。景品にはボン／＼時計がある、反物がある。正宗の燭などもぞろりと並べられた。夏のことであつたから、涼みがてらに白地の人などが、子供の手をひいて縁門をくいつた。それが三週間ばかり續いた。けば／＼しい裝飾はとられたけれども、何處となく古着店が／＼つて居た吉野屋の面影はなく、生々とした店になつた、と向ひ合つた家々では噂さした。小僧の顔も二人ばかり新らしくなつた。

八疊の間には四人が爲すこともなく日を送つた。儀助は一日畑につめて、手を後に組んで大工どもの仕事を居る。夕方になると、炭俵に鉋屑や木つ端を詰めて、一々それを納屋に入れた。夜になると煙草入れを持つて、ふらりと店に出かけて見る。すると新主人はいつも、二言三言のお愛想をいつて、後はさも氣忙しさうに、帳場にかへつてパチ／＼はじめる。こんな時に陰の八疊では、暗い洋燈の下に、足の痛さをさすりながらも、屑綿をはかすとか、糸

先生あれでなか／＼小金を持つて居るんだ、某々の銀行に幾何／＼の預金があるさうだ、などいふやうなことが、何處からともなく人々の口に傳へられた。

畑の中の家が出來あがるのを待たず、佛壇のある薄暗い八疊に、長火鉢を一つ置いて、親子と老母の四人は其室に籠つた。

紺の色新らしく染められた暖簾は、筆法勢よく加賀屋と讀まれた。棚の向きを替へて、目覚めるやうなメレンスをかけるやら、帳場の位置を直すやら、新しい主人は、朝に晩に、揚子を使ひながら、下駄をつゝかけて、あゝでもない、かうでもない、店のふりを見て置いては直した。間もなく大仕掛けの賣り出しがはじめられた。家の前には縁門がたつて、それには山に丸の印を書いた赤い小旗が無数にさゝられた。二本の旗竿には、赤と紫とが、白くぬいた大賣出しの太い字を繕つて流れた。鬼灯提燈を二列に渡して、向ひの唐物店の二階の格子に結びつけ

を繼ぐとか、何かしら手を動かして居る老母が、定つて心で「ふん！」といつた。自分で考へて見て可笑しくなる程、譯なしに加賀屋の夫婦のやることが氣に喰はなかつた。澤山の蜻蛉が押し寄せて來て、ぶん／＼唸りながら神棚の中にはいり込んで、乗燭の油をむらがつて吸つて居る。それをほりはたきで追ひたてようとすると、蜻蛉は一疋も残らず自分の襟もとに吸ひついて放れない。聲をたてようともしても聲が出ず、跪いて／＼居るところへ、大きな黒い塊りが後から轉げて來て、どんとぶつ／＼かつて、自分はごろ／＼と眞つ暗な穴の中に落ちてしまつた。いつかのこんな夢を思ひ出して、其黒い塊りはあの夫婦の心に違ひない、など／＼こんなことをさへ思ふ時があつた。五つになる加賀屋の子が、或る時ちよこ／＼とやつて來て、指をなめて障子に穴をあけて、中を覗いて見たといつて、眞つ向になつて怒つたこともある。

成田山の御利益で子供が授かり、自分の病氣も癒

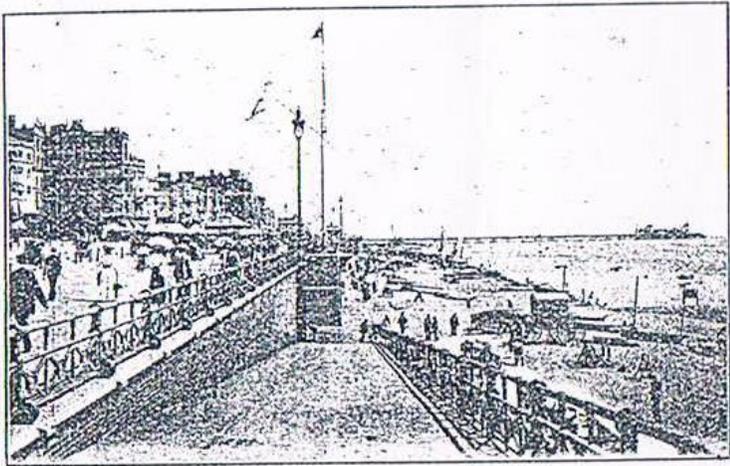
つたと思つて居るお里は、常には人を疑ふなど、いふ毒氣は少しもなかつた。其毒氣のないのが、幾分か精神に異常のある徴であつた。時とすると、自分一人を寄つて群つて打擲したり叩いたり、子まである仲を裂いて、此家を追ひ出さうとする、密議の有様などを、まさしくと幻影に見て、興奮しきつた顔を眞つ赤にして、泣き聲をたてながら一人言を云つて居る時がある。こんな時には荒々しく、却ていろいろな仕事をした。それでも物賣りが來たり、人に言葉をかけられたりすると、さもない風で満足な應對をして居た。家内のものは、馴れて居るから、もう其時は黙つて放擲つて置く。するうちに自づと落ちついて、けろりとした風で、襷をはづして袈裟がけにして、戸棚から丸いお膳を出して、カチ／＼箸の音をたてながら、内輪にお晝を喰べにかゝる。若いうちから白髪の多かつた人で、その頃はよく染めて居た。

「おや／＼まア綺麗に飾られて……おつ母さん出て

朝なり晩なり時候の挨拶を柔くいふ。臺所は一掃に使つて居たので、老母は店の者の賄ひ方を睨んだり、そつとお汁鍋の蓋を取つて見たりなどした。

近在の得意が時々何氣なしにやつて來た。暖簾が替つて居るのに驚いて、譯を聞いて、多くはわざ／＼勝手まで寄つて聲をかけて行く。さういふ人達を、老母は我故郷人のやうになつかしがつて、お茶など煎れて飲ましてやつた。

菊の節句も近づいて、お神棚の幣帛も新しくなり、其日は栗の赤飯に菊の花を隅に入れて赤い手をした小僧がお重を配つて歩く頃となつた。畑の中の家はやう／＼鉋を納めた。日を見て移轉がはじめられ



英國アライント海岸通

ごらんなさんしよ、なんてまア綺麗に……へ／＼とんでもない時にえへ／＼とさも可笑しうに笑ひ出すのが癖で、初対面の人は、これに驚かされてよく顔を見たものだ、自分ではそれを意識してないのかも知れない。——仕切りの障子を開けて、とほんとした顔を出して店を眺めて居る時なぞがある。すると老母はまた「ふん！」と思つて、「どれもこれも馬鹿者揃ひだ！」とばかり、返事もしないで糸を縫つて居る。老母は伴が籬暖を疊んだ心得違ひを充分に知つて居乍ら、たゞどうしても人が憎まれて仕様がなかつた。小僧ども、今まではより／＼よく働くやうな氣がする。店が立派になつた、賑かになつた。といふ人の口が、尖つて自分の身を刺すやうに感じた。加賀屋の内儀に顔を合せ度に、屈辱の復讐といつたやうな心を持つた。「此婆め！」といふ内儀の胸と、「この猫かぶりが！」と思ふ老母の心とが、不意と顔を合せた時にぶつかつて、内儀さんの眼がひらりと閃く時がある。が瞬間に笑顔を顔して、

た。新主人は自分と小僧一人だけを殘して、あとの者を皆玉傳はせた。二三の親戚、近所隣りからも、一人づゝの手傳ひがあつた。垢舞ひの時の道具や、餘所行きの衣類などは裏の倉に殘して、日常の用具ばかり荷車で運んだ。落ちつかぬながら、大抵のものゝの位置がきまつて、夕陽に鳥の影が見える頃、家の前に石油の箱を並べて、それに張り板を渡して、手傳人を慰勞の酒が出わ程近い儀助が妹の嫁入り先から女衆が襷がけて料理を運んだ。家はまだ壁のにはひがして、木の香が充ちて居た。お米は早く朝早く目を覺まして下駄を履いた。色づいた柿の梢を見しめて、袂をかついて、

歌をうたつた。なにもかも珍らしく、なにもかも嬉しかつた。

それから三年経つたのである。垣の木槿の花の瓣を短く摘んで、それを獨樂にして遊んだ廊下はくろすんで来た。見付けて来てはさまざまのものを、無暗に置いたり植ゑたりした家の前は、いつか立派な庭になつて居た。年々夏蠶を飼つて十溜近くの繭をとつて、其うちの幾分をお米のものとして織つて置いた。

時々鍵をさげて表町の倉にやつて来ては、井戸の前が何時も腐つて居るの、窺が破れて濕吹があたつて、これでは倉が堪らないのと、何か知ら小言を撒いて行つた老母は、其頃から持病の神經痛が重つて、其冬は炬燵を一つ持ち切りで唸つて居た。

婿が来てからは儀助は益々用のない體になつた。毎日長火鉢の前に坐つて、膝を揺す居るか、さもなれば表町に出かけて、人の家の店に腰をかけて、ぼんやり表を眺めて居る。主人が對手になつて居よ

度貸金のことか何かで被告どられて、地方の裁判所に召喚されたことがあるが、二月ばかり過ぎて、勝訴になつて歸つて来た。内々或る高利貸と結託して、鑛山に手を出したなどいふ噂もある。兎も角も店は立派に張つて行く。脊の割に長い羽織をひつかけて、よく小さな、細長い風呂敷包みを持つて、何處へか出かけて行つた。人使ひが上手とでもいふのだらう、内儀は店の者どもを、がみん、叱りつけるやうなことは決してなく、大抵は店に出て目になつて居た。此家のお茶受けには、いつも梅干に砂糖をかけたのが、盆に乗つてないことはなかつた。

お米は間もなく妊娠した。それが目にたつやうになつたので、荒土のまゝで置いた壁に漆喰ひを塗るやら、風呂場の普請を仕直すやら、大急ぎで用意をして、遠方の親戚にも招待状を發して、公然結婚の披露をした。お米は俄に老成たことをいふやうになつた。其代りまた一家を切り廻して役にも立つた。男の子が生れた。激痛と疲勞のこんぐらかつた夢

うが居まいが、そんなことを氣にかけるやうな人ではなかつた。知つた家では、邪魔にもしなれば、歓迎もせず、手隙だつたら話位はするし、用があつたら遠慮なく放つて置く。

役場の火の見た天氣豫報の旗が、赤白青と變へられて、五月雨が續く頃になると、暫く町に儀助の姿が見えなくなる。私得仕事程の夏蠶が、馬鹿に出来ず手数を要するからである。近年畑を多く桑にしつたので、其買手も日に二三人づつはやつて来る。仲買ひとの算盤の掛け引き、それが無事に手を拍つた！したところで、畑渡しのあとの切り直しやら、貫口渡しなら出向いて秤の目を検査なければならぬ。堀み子に賃銀を渡すやら何やら、其頃だけはお茶うけの紅梅焼もゆつくり喰べて居られないのである。でも良三郎はそんなことまで抜け目なく甘くやつた。仲買手を對手に掛け引きもなかく強くやつた。加賀屋の主人は、相變らず丸い目をしよほつかせて、前掛けをいつも落ちさうに緩く締めて居る。一

中におろす時に、突然擧げた泣き聲を聞いて、お米は自分が強い人間になつたやうな氣がした。風のかけから、息の切れる聲を出して力をつけて居た老母は、男の子と聞いて涙をこぼして喜んだ。そして一月と経たないうちに、病苦は辛らかつたけれども、心を安じて永い眠りに就いた。

益々穩やかな一家となつた。孫を抱えて、儀助は毎日のやうに表に出て来た。エ供が降りるといへば何處にでもおろし、行くといへば何處までも歩いて行つた。千哉と名付けて、それは知り合ひの神主に選んで貰つた名である。

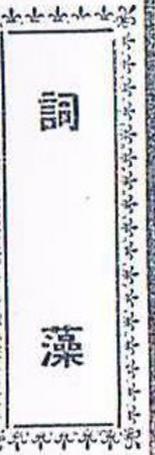
千哉は今年四つになつた。其名の貯金で買つた券が、この春抽籤で一等に當つて五十圓とれた。畑の家の周圍には、今ではすつかり棟割り長家が出来て、一日繩に通した襟裾がふらふらして居る。お米は縁側に解き物をして居て、役場からの督促市が、人夫を連れて来て、或る家から鍋や釜など

微發して行くのを見たことがある。

良三郎は去年の暮から、遊んで居るよりはと或人の世話で、役場の収入役を勤めて居る。今でも毎日辨當を持つて朝の八時に出かけてゆく。

お米はまた褪せた顔色をして肩で息を吐いて居る。此頃東京で生活をして居る昔の友達に、送つた手紙にいつまでこんなにして居ても仕方がないから、早く商買なら商買をするやうな工夫をしたいと思ふ。たゞかうして寢食いして居ては、いつまで過ぎてても浮ぶ瀬はないし、第一世間から大した株でもあるやうに見られるのが辛い。などといふやうなことが細々と書いてあつた。太郎は如何にして教育すべきやなどといふ本本から得た知識で、子供の教育のことなども書いてあつた。

吉野屋からの小僧連は、今は大抵徴兵の検査が終つて、引き續き、新しい紬の羽織を着て、畑の家にも暇乞ひに來た。加賀屋では、今年も等級を一等のばすべく、町會議員連から睨まれて居る。



詞

藻

天

避暑地より従妹の許に

四谷 櫻

子

つうちやんしばらく、お暑くなつたわねえ、何していらつしやつて？ 伯父様伯母様御變りもない事？ こちらは毎日それは大變よ、何しろ母や兄はまださす、皆こわいものなして兄弟喧嘩はたえまなし、弟がすねれば妹が泣く、朝かう晩までさう動、でも中々面白いのよ。いつも朝は大低五時に起きて、すぐ海に深呼吸にでかけるの、いふ心地も種々なきれいな貝が澤山あがつてゐて、つうちやんの好きなあの薄色の貝がら、あれなんかもそれは澤山あるの。毎朝みんなが手に一ぱいづゝひろつてくるのよ。そして午前が勉強、午後が海水浴。私も二間およげる様になつたの、えらいでしょう、ホ、自慢じゃあない事よ、正直かけねなしよほめて頂戴。

夕方お湯へはいつて、ごはんをたべると、嬬も連れて散歩にでるの。町を通つて浴邊へでると、此ころはお日様がそれほいふのよ。あの金波銀波の海しづかといふ歌ねえ、その通り波がキラキラと光つてほんとにきれいで、そして涼しい風がたえず袂をなぶつて、まあ何と形容していふか分らないわ、からだも心もとけてしまひさうよ。かへるとじきに八時頃、お床へはいつて私が少しお得意の孫悟空の話を皆にしてやつて、それからぼてんでに勝手な事をしやべり散らして、其中に段々一人一人落城してゆく。毎日々々同じ事をくりかへしてちつともあきないから面白いわ。母は、姉の御産の事や何かあるからまだ仲々きませんし、兄も試験がまだすまないのよ。だから下は私がいき大將、つうちやん是非一度いらつしやいな、伯母様に伺つて二三日泊りがけでね、今くれば副將位にしてあげて、ね。伺つて、早くいらつしやいな。なるべくさつとよ。もつとさかきたいけれど、あんまり長くなつたから又今度ね。さようなら。

儀助は相變らず、時々表に出かけて行つては、先に腰を下して、昔ながらの鈍豆煙管ですばりくやつて居る。此頃は大分頭が白くなつた。

お嬢様のお辨當

学校通ひのお嬢様方で、お辨當を持って學校に行くとな嬢がる向か、夫れは途中體裁が悪いからと云ふのださうだ、夫れから又辨當に持にしても成べく小さく體裁のよいのでなければならぬと云ふもある夫から今度おカズが不味いものだからと云ふので、其日だべつたりあはせと云ふのもある、人間は三度飯を食ふ者である、辨當持て歩くのがナセ體裁が悪い、少くなく食べるのが何で上品であるおカズの悪いのがナセ恥しい、殊に學校通ひの年頃は食ふて食ふても腹の空く時代で、體の發育の盛んな頃であるのに、辨當持たずに空腹を忍んだり態々少くなく食つて不足を感じたりするはよく無いさうして晩飯の時には空腹に堪へ兼ねて一時に多く食か又は必ず學校から歸て間食をする、體裁よりも何よりも先第一體の不爲である親々はよく此理を説きて諭すのがよからう。